

母の実家で知ったお米の大切さ

陽東中 一年 大森 宣裕

母の実家では、毎年、五月に田植え、九月に稲かりをする。その作業を手伝うために、家族五人で、栃木県から石川県に八時間ほどかけて車で帰省している。普段はなかなか会えないといとこ達や近所の人達も集まり、総勢約二十名で作業を進める。久しぶりにいところ達に会えるので、それも毎年、楽しみだ。

田植えは、午前九時頃から祖父が田植え機

を運転して苗を植え始める。小さい頃は、その隣に乗って、ドキドキしながら祖父の作業を観察した。植える経路や順番を工夫するが、経路の境目や田んぼの端など、どうしても機械で植えることができない場所が出てくる。いよいよ僕達の出番だ。始めは、服が汚れないよう慎重に進めるが、田んぼは沼のような感じで足が吸い込まれて抜きづらくなかなか前に進まない。苗を植えては足を抜き、植えては足を抜く、というように繰り返している。

とすでに服は泥だらけとなっていている。三、四年前までは、出番の前に兄達と泥をかけ合って遊んでしまい、全身泥んこになって、お手伝いどころではなかつた。今では、作業のユツもつかみ、早く終わるよう頑張っている。お昼になると、用水路で足を洗い、全員でお弁当を囲む。青々とした田んぼや山々の景色をながめながら、みんなで食べるお弁当は最高においしい。子ども達はお弁当を食べ終えると家に帰るが、大人達は昼過ぎまで作業を続ける。僕は、近所の人と山でたけのこを屈つてから帰宅する。

稲かりは、田植えと同じように、朝から稲かり機を使って始める。田植えのときは違いい沼のようではないので、歩くのは楽だし泥だらけにもならない。機械でかれなかつた場所の稲を鎌でかり取っていく。稲の根本を手でつかんで押さえ鎌でかるという一連の作業はなかなか難しい。僕もようやくできるようになった。稲かりの時も田んぼの近くでみんな

なでお弁当を食べる。田植えの時とは違っ
見える景色が変わる。黄金色の田んぼ、赤や
橙色に染まった山々、そして、赤とんぼが飛
んでいる。

僕は、小学四年生くらいまで田植えと稲か
りだけでお米を作ることができると思っ
た。ある時、祖父との話から、田植えの前
に田おこしや代かき、草かり、水の管理を
していることを知った。母の実家の田んぼは
山水を使っているのだ。冬に雪が少ないと
水量が

減る。数年前も山水がほとんど流れず、
河川から水を運んで調整したようだ。最近
では、イノシシによる被害が多く、その
駆除のため田んぼの周りに電気が流れる
鉄線が張られている。イノシシが田んぼ
でふん尿をすると、お米のおいしさに影
響が出るようだ。僕も家の庭できゅうり
やトマト、ナスなどを育てているので、
土おこしや草取りなどの大変さはある程
度分かっている。しかし、家の庭の何
十倍もの広さの田んぼの管理は、僕の想
像を

超える苦勞があると思う。

一粒のお米には、多くの人の苦勞や思いが含まれている。僕は、その苦勞を知っているからこそ、一粒もご飯を残さない。お金を払えばスーパなどでお米を買うことができる。自分が関わったお米であれ、買ったお米であれ、ご飯を食べるとき、どのような人が関わり、どれくらいの間を掛けて、どのように作られているかなどを考えながら、ご飯を食べたい。